
僕とおかんと狂気の父

クレイジーダディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とおかんと狂気の父

【Nコード】

N1041BA

【作者名】

クレイジーダディ

【あらすじ】

キーワードを見て来た方、ごめんなさい。ネタです。

内容的には、引きこもりのお兄ちゃんを立ち直らせようと奮闘する、とある一家のお話です。

おバカパロディー映画みたいな雰囲気にしたいと思ってます。

史上災狂の家族会議

俺の父親はクレイジーだ。

世間には『マッドサイエンティスト』などという素敵な言葉もあるのに、あのバカ父はその上に行く『クレイジーサイエンティスト』なのだ。

そのクレイジーに呼ばれて、俺は彼のラボへと向かった。ラボは我が家の最深部……何のことは無い、単なる地下室だ。そこは建築法も無視した広さで、おそらく両隣三軒分はぶち抜いているであろう、ただっ広い空間になっている。

「ごちゃごちゃと絡まりあうケーブルの間から父が顔をあげた。

「十五歳の誕生日、おめでとう。」

につこりと純真そうな笑顔を見せる父に、俺の心がざざ波を立てた。こいつの笑顔にはいい思い出がない。

あれは小学校の運動会前のこと。絶望的なほど鈍足の俺に、父はこの笑顔で『バッタの遺伝子を組み込む』改造手術を行おうとした。その翌年には、怪しげな遺伝子操作を施した毒蜘蛛をけしかけられたりもした。この、曇りの無い笑顔で……

今年は一切何をしでかすつもりなのか、父は俺の肩をしっかりと掴み、ラボのさらに奥へと導いた。

「お前も今年で十五歳かあ……十五と言えば、かの有名なモビルスーツ乗りが白い悪魔と出会ったころだな。彼のみならず、優秀なパイロットというものは十四歳から十八歳までの間に、愛機との出会いを果たすものだ。」

正直に言おう。この説明のみならず、ラボの奥に横たわる『それ』に、俺は不安しか覚えない。

『それ』は体長二十メートルほど。全身をパッションピンクの虎もようにカラーリングされ、頭部はきつめのパンチパーマ風の……
「超汎用人型兵器『オカングレリオン』だ。」

父のクレイジーな笑顔は、はじけんばかりに輝いている。そんなドヤ顔されても……ねえ。

「まさか、これに乗れって言うんですか？」

「『乗らないなら帰れ』」

「じゃあ、帰ります……」

「まーまーまー、そう言わずに。『シンジ、オカンに乗れ』」

「俺はダイキですけどね？」

父は俺を無理矢理コックピットに押し込んだ。

「液体が入っているナントカプラグとかじゃないんですか。」

「そこにマニユアルが置いてあるだろう？」

俺は広辞苑ほどの分厚さがあるマニユアルをひっぱりだし、そこにある難解な説明の通りにスイッチを入れた。

ズブーウウウウン。

低いうなりをあげてオカンゲリオンがゆっくりと立ち上がる。

「こいつ……動くぞ！」

コックピット内の計器に明かりが灯り、瞼をひらくように全方向モニターに景色が映し出される。

俺は生まれてはじめて父を見直した。『男の子のあこがれ』が、今、俺の手で動いている！

「父さん！すごいよ、これ！俺がんばってこのマニユアルを……」

「覚えなくても大丈夫だぞ。シンクロシステムも搭載しているからな。」

「じゃあ、このクソ分厚いマニユアルは？」

「んー、何て言うの？ノリ？」

軽い殺意に、最新鋭のシステムが鋭敏に反応した。

パンチが父の体をかすめ、鋼鉄で加工されたラボの床を大きくえぐる。

父の細い体は軽く跳ね上がり、ぺたりと座りこんだ父は、少しうるんだ眼差しでこちらを見上げた。

「母さん、見たかい？もうシステムを使いこなしているよ。」

父の視線は真っ直ぐこちらに……オカングリオンに注がれている。

いやな予感が……いや、いやな予感だけが俺の胸中に渦を巻いた。

「そう言えば、今朝から見かけないんだけどさあ、母さんって……どこに？」

父ががっくりとこうべを垂れた。

「事故だった……」

そのただならぬ様子に俺の心臓が、胸板の内側を叩いた。

「昨夜、オカングリオンのシンクロテストをしている最中に……母さんは……」

父は顔をあげ、ペろりと舌を出した。

「そこに取り込まれちゃった。」

……なんてことを！

「いいじゃん。母さんはどんな姿になっても、キュートだよ？」

(父さんったら、子供の前で?)

その声は俺のはるか頭上、オカングリオンの口から聞こえてきた。

「……いつ……喋るぞ！」

……って、そうじゃないだろ！俺。

「二人揃って、何やってんですか！戦う相手もないのに、こんな兵器を作るために母さんまで犠牲にして……」

(戦う相手なら……居る。)

父も、まじめで深刻『そうな』顔をした。

「実は、お前には兄さんがいるんだ。」

……いや、そんな演出いらないから。

「兄さんは数年前から引きこもってしまって、二階の部屋から出てこない……だから、お前が兄さんを覚えていないのは当たり前だ……」

……いやいや、普通に覚えてますから。昨日も便所の前ですれ違っ

たし？

『生き別れの兄』設定に嫌気がさした俺は、ガンガン話を進めることにした。

「で、なに？兄ちゃんを引きずり出せばいいの？」

「さすが、家のエースパイロットだ！すばらしい理解力！」

確かにこのオカンゲリオンなら、部屋のドアを指先で軽くひきはがし、引きこもり生活で太りきった兄をハムスターの様に掴むことができるだろう。むしろ、過ぎたる力だ。

しかし、そのためにはこのでかい図体を表へ運び出さなくてはならない。

「じゃあ父さん、射出してよ。」

「この状況で下ネタとは……さすがだ！」

「何もエロい事は言っていないよ！エロそうな響きの言葉だけどさあ。そうじゃなくて、アニメとかであるじゃない？メカを乗せて、地上にシューって出すやつ。」

「ああ、あれかあ……」

父が急に遠い目をした。うつろな唇から言葉がこぼれる。

「……作るの、忘れた。」

(いいじゃない、その辺にチャツチャツと穴開けて出れば？)

「そんな近所迷惑な！引きこもり一人引きずり出す為だけに、どれだけの被害を出すつもりですか！」

「バカ者！あいつはただの引きこもりではないぞ！」

「ただの……引きこもりじゃ……ない？」

俺は、見逃すべきではなかったんだ。俺達の会話をあざ笑うかのように、ラボの片隅で小さく光っているあのランプを。

「早くしろ！あいつに気づかれでもしたら……」

ラボ全体が振動し始めた。揺すられた壁が軽く音を立てる。

「やつだ！やつが来る！」

父の叫びに呼び寄せられたかのように、床の一部を押し上げて巨大な手が見えた。

ガシガシとした鉄の質感を持つその手は、明らかに巨大なロボットの一部分。おそらく近所迷惑とは無縁なパイロットに操られる、悪魔の存在。

俺の中で戦うための本能が揺り動かされ、呼び覚まされ、そして牙をむいた。

俺はその本能のままに雄叫びをあげた。

史上災狂の家族会議（後書き）

「次話、『目覚めし引きこもり』に、レディ・ゴーン！」

目覚めし引きこもり

やつはとにかくでかかった。……横幅が。

オカンゲリオンの二倍はあるうかという、でっぴりとしたボディが地中から抜け出し、二階の兄の部屋を家から引き剥がした。大小の破片が地中から見上げている俺たちにまで降りかかる。

「現れたか、『デブルガンダム』め……」

何かの補強が施されているらしく、部屋はきれいなキューブ状に家から切り取られた。それを体内へと取り込んだデブルガンダムの目が、命あるものの如く光を帯びる。

「我が岩戸を開こうとは……」

兄の声が近所中に響き渡る。

「笑止！」

あまりのばかばかしさに、俺はあきれて動くことすら忘れていた。
(何ばーっとしてるの。早く行くよ！)

オカンゲリオンはそんな俺にはお構いなしに、やつが大きく開けた穴をよじ登って行く。

……ん？お構いなしに？

「あのさあ、母さん。」

(なあに、ダイキ？)

「もしかして、俺が乗ってなくても動ける系？」

オカンゲリオンの動きが止まった。

「できれば、降ろして欲しいんだけど……」

シュゴオオ……

哀しげな排気音とともに、コックピット内の明かりが全て消えた。
(お父さん、ダイキが……ダイキが私と一緒に戦うのはいやだつて……)

やる気の全てを失ったオカンゲリオンは、全ての機能が停止したまま穴の出口にたたずんでいる。

デブルガンダムは、不吉に輝く眼差しでこちらを見た。

「母さん、やばいつて。動け、動け動け……動いてよぉ！」

ごつごつとした鋼鉄の腕がオカングリオンの頭部を掴み、引き起し、高々と持ち上げた。

（心を開かなければ、オカンは動かないわ。）

デブルガンダムは、だらしなく吊りあげられたボディに容赦のないパンチを叩き込こんでくる。

シンクロシステムが切れているとはいえ、その物理的なダメージはコックピットを軋ませ、シートに強く叩きつけられた俺は十分なダメージにうめき声をあげた。

「母さん、いじけてる場合じゃないよ。いい加減動いてよ……」

（心を開かなくてはっ！オカンは動かないわっ！！！！）

「あーもう、解ったよ……母さんごめん。俺が悪かったよ。一緒に頑張つて戦おう、な。」

コックピット内に明かりが戻ってきた。頭部を掴んでいたやつ腕を振り払い、オカングリオンはしっかりと、その両の脚を大地につけた。

突き放されたデブルガンダムは大きくよろめき、ご近所を揺るがしながら片膝をついた。

俺は静かに目を閉じて、シンクロシステムの中に意識をもぐりこませる。

……十……二十……三十パーセント！

視覚野から聴覚までがつながる。

……四十……五十……六十パーセント！

その巨大な体の感覚の全てが、カチリと俺の神経につながった。目の前の不格好な鋼鉄の塊が、運動不足で肥え切った兄の姿と一致した。

兄はただ太いだけの腕を振り上げ、大きなパンチを叩き込もうとする。俺は小さくかがみこんで、その鼻先に小さく振りこんだ拳を叩き込んだ。

「見損なつたよ、兄ちゃん。女に手を挙げるなんてさあ。」

「うっせーな、ババアは女に数えねえんだよ！」

デヴの全体重を乗せた体当たりが俺を弾き飛ばし、バランスを取り損ねた俺は隣の田中さん宅に突っ込んだ。外壁のサイディングが砕け散り、柱を失った民家が見事に崩れ落ちる。

「田中さあーん！」

俺はがれきをはねのけ、少々毛の薄くなった隣人の姿を探した。

……うそだ。あの田中さんが……道で会うたび、飴をくれたあの優しいおじさんが……最近、てっぺんがさらに薄くなってきた、あの田中さんが……

座り込むようにしてがれきをかき分ける俺の背中を、兄は容赦なく蹴り下げ続ける。

戦いの炎が潰えようとしているコックピットの中に、父からの通信が響いた。

【何をしている！戦え、立って戦うんだ。】

「だって、父さん……田中のおじさんが……」

【あ？田中さんと話したいのか？】

ひどくノイズの混じる通信機の向こうで、陽気な声があった。

【いいねー、兄弟げんか！おじさんも昔はよくやったよ。】

「もしかして……酔ってます？」

【ンあゝ、何だっけ？そうそう、特別非常事態宣言ってことでシエルトーに避難してるんだけど、お父さんがいい酒を用意してくれてね……】

……通信がざわざわしてるのは、ノイズじゃなくて宴会？

【がんばりなよゝ、みんなここで応援してるからねゝ。】

応援されてももう遅い！

デヴ……いや、兄は俺を引き倒した。押さえこまれる感覚が、俺の肺から全ての酸素を絞り出す。

「この機体は、特殊な金属構造のナノ素体で作られているんだ。」
デブルガンダムが、獲物をとらえた肉食獣のように厭らしく笑った……様な気がした。

完璧なマウントポジションと、デヴの体重の前にオカンゲリオンの機体がきしむ。シンクロスシステムで接続された俺の神経にも、そのきしみが『痛み』として伝わる。

なすすべもなく横たわる俺に、デブルガンダムの顔がぐいっと近づいた。

「お前も、俺の一部として取り込んでやるよ。」

その分子レベルでの構成の変化は、デブルガンダムの表面を、ズルリと粘り気のある液体状に変え、そのゲル状の物質はオカンゲリオンの装甲の隙間から、俺の中に滑り込んできた。

「やめ……やめて、兄ちゃん……」

内臓をまさぐられるような感覚に、俺の息が弾み上がる。

「力を抜け。俺の全てを受け入れろ……」

兄が耳元で甘く低く、ささやく。

今や不定形の液状となったデビルガンダムが、俺をすっかり飲みこもうとしている。

「兄ちゃん、R18もつけないで、このBL展開はちょっと……」

俺の言葉は兄の荒くなる息遣いに飲み込まれた。

目覚めし引きこもり（後書き）

父「次話、『大団円、そして』。この次もお、サービス、サービス
？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1041ba/>

僕とおかんと狂気の父

2012年1月5日00時50分発行